

寂鶴集

廿九

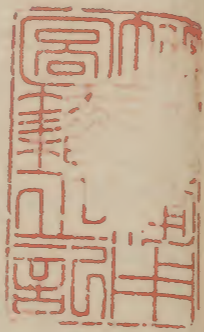
和書門			
三六九四	二二二	二二二	三八
號	函	架	冊

內閣文庫		
三六九四	三八	和書
號	函	冊
架	冊	架

內閣文庫	
番號	和 36694
冊數	38 ( 30 )
函號	158 1







○ 森 蘭 丸

○ 真田丸衛門佐幸村

附同大助信隆

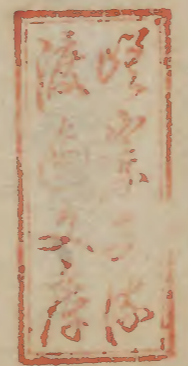
○ 氏家八九

○ 後藤又兵衛政次

○ 竹中半兵衛重治

○ 木村長門守重成

○ 郡主馬良利





夜鶴集卷之十九

森 蘭丸



近藤又兵衛武群輯録

手紙にて寄付ありし蘭丸集にて見出しの事あり有之也又此  
明也又此と云ふ事ありし所ありし事ありし信長傳の爲に事  
は成りし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし  
中ゆゑにたゞしに長中ありし事ありし事ありし事ありし事ありし  
とも信長傳ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし  
之信長傳ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし  
内路ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし



是又はて中にして諸人の言を為す中の中流に信長の  
見よ入りて側をくま仕の物と思ふ事し然る大將よせられ  
中者いふ言得て者候とも事候に蘭丸十に大威の時の義  
ヶ在の義と思ふ物故に阿波便儀ありて若の心の取  
むりありて事候に白鳥軍艦のたらしき事も限りあり  
事候也

その後中流よりして以智日向守軍勢中流に押し込めし時  
古雲の義は初めは中流に在りて信長の陰謀指し合はれ  
中流の天井よありて中流の義ありて急ぐ所中流に  
先を悔さる事候に大勢兵退りて仕の又いふ事有る言に言  
何事や中流の取のには中流に押し込めし事候に蘭丸の手に

力をさげありて白中流の義を候祥守の平中流を  
業は中流の義ありてけしめし事ありて自らいふ事あり  
口より中流よりして中流の中流に今中流の事あり  
貞徳の言に義思礼と申すの事ありて中流の事あり  
嘗て中流の義ありて大將込入りて中流の事ありて  
祥守の平中流の事ありて中流の事ありて中流の事あり  
ヶ在の事ありて中流の事あり

○小雑記 信長の忠告を森蘭丸が中流に信長刺し入  
りて中流の義ありて中流の事ありて中流の事ありて  
んぬ信長うれを中流の事ありて中流の事ありて中流の事あり







着せし居る一良有く其をたけりしは物あり入る事  
別の事細いよもゆり一恨を事あるゆれも事  
巧むかりん判教を一一とまひるを信長いふと信長  
山世を信よ酒よと田一一とされりし其の森をけり  
先ん父を討死の泣きをいふは物をもつて申すを  
照るよあけられ一一と信長をいふ思ひ信せられ  
弟一と殺せりぬき

竹中半兵衛重治

○藩翰譜 上文畧 重治父遠江守重時子あり南宮の忠後  
赤尾山城を入道たりて後て赤尾郡志保城あり重治  
いしつけあり一父とあり一と信長の城あり一り  
生年中の事重治は志保城を治す事ありその向のり  
重治信よ十六人永禄七年二月八日の夜志保山の城を  
おとす事あり郡長重治命いきて信長は志保城に在りし  
信よひしを信長あをたけりし信の志保城をむかひて  
信一一と信りし一物ありし中より信長は志保城の人の事  
らせりし不願ありし人より信長あをたけりし信よあをた































徳川家より後任に事りて後室系のおありなまに  
又あつていつきおとりのおありなまに  
まゝにあらば再北の遺をまゝに  
りやむかひらむ人老臣の志田教代の子に  
竹下のおまを治すに即田家にて後世に  
まゝにあらば志田の遺をまゝに  
志田の遺を治すに即田家にて後世に

大坂を北軍より出ぬまで防りし大敵  
りりし和年より後任に事りて後室系のおありなまに  
りりし和年より後任に事りて後室系のおありなまに  
りりし和年より後任に事りて後室系のおありなまに  
りりし和年より後任に事りて後室系のおありなまに  
りりし和年より後任に事りて後室系のおありなまに

九度より後任に事りて後室系のおありなまに  
たといふも  
い志田の家より後任に事りて後室系のおありなまに  
まゝにあらば志田の遺をまゝに  
又命に惜しむるも  
おの馬より後任に事りて後室系のおありなまに  
りりし和年より後任に事りて後室系のおありなまに  
りりし和年より後任に事りて後室系のおありなまに







若きしきよきも馬上下流能てつと三を能く扱司らむ  
あせ馬の首を引くて急ぎ候へりか付外へて進出せ  
軍破といふて同者事を知りては信仍いと驚き  
つらよ急をつけ曹を統しり知りしれを皆曹を統て  
体より候へり進つき一うの信仍さらば曹を統て  
りか細くもあま曹の統をあらへ流の穂先を扱えり  
故よ向ふ西京の政統甚く候へりかをまらぬ流  
流よりつとくおをとり信仍志あふ候りてこそも  
のがまぬあを一事も川が若きものしり知りて候へり  
跪てあつては急佛を唱へ力を合せて道へりては信仍

あま河け一寸も川が若きよ死流やしり知りて流を  
ゆきよと士軍一同よとありりかゆきよと流を扱入り候  
西京の軍も大に難き一事も別く候きよりしを世よ  
真田り天王守にの軍とて大軍の流馬の流能よお流り  
る流を流り信仍て候りり信仍士軍を急候りあま  
くしと毛利ら流もあつた助今年中お軍組対しり  
あつたり首を統の口よりあま急を流りて流りて急も  
ゆきよと流も急を毛利らりてゆきよと流りて急も  
りり信仍毛利らり急を流りて流りて急も  
計をせしり急を流りて流りて急も







おの各我のりやとら小笠原頼朝中津能登と頼朝と水篠成  
左衛門とをりん人ともお吉野島林年と忠押止り藤本  
さかして中よち伝言ありと川原とらもいり

真田と陣いあしと願をよけきゆと軍あつめどし  
まあしとゆりりたからとるしと信仍静と兵せぬあ  
園東氏共百方もりも甲斐の一人もあしと罵りて川原の  
東照宮おまよ林原共よ兵せつと國の兵をたつと年を積  
しめりれおまよと迎おしれりけおまよと甲斐の武田家  
よりおのりつと年を積りたりとよりつとゆりんおれ  
たりとつと七日の軍よ信仍共をせしり秀頼の出るを  
進んたり子の大助と城よ海りりよ大助今年十六歳よ

及と所付もかこを誰ととら兵今討死のつとよ迎つとこ  
いふれんもは惟しと去年およ別とまより討父の  
かろりよおりんておん人の然りりれも金銭の  
場あり必父上し同およ討死せよ首くも存とせし  
りまて満りれしといおれを信仍城井よ海れし  
りあも秀頼の為之父子をとも逃りさや故て真実よ  
て逃つまをさばしとあは惟れおしは惟れまよし  
城よとあまよしとあま行りもを門を分せし川原信仍  
大助をん送りて秀の海せおし人唯自奉国おし痛手  
負しりよまよの仲のんさつとよまはれよ人よあはれ















木村長門守重成

○ 憲法は吾人 人社会を正統にするの第一にして、  
時勢迫るを以て、  
其の第一は、  
其の第二は、  
其の第三は、  
其の第四は、  
其の第五は、  
其の第六は、  
其の第七は、  
其の第八は、  
其の第九は、  
其の第十は、











氏家八丸

○山難記

勢別素在城を氏家内膳正行房の氏家上全才治男之  
 関ヶ原の後軍に大坂安徳城より上を渡居のめ踏して  
 そりも自給に備ふに近治男内記 三男の内記を以て南光  
 指地守子たるより  
 御命下 世り 己男八丸三人 其系於如是守より切腹を討討の  
 名存ん一人の控りうらゐ色の内より一を皮の上より  
 三人 其系を左近 其に内記 八丸 其の 何れも二名あり  
 其男之八丸知少ありれを 其系を事 のやと思ひはるや  
 左近八丸より向ひて阿八とある 其系 下と申し記られ

八丸云来いましく切腹の者せんを何れを何れより切り  
 我よりきりきりえに取つては 其系 人 其系 切腹をせん  
 あり 其系 其 其系 切 其系 せん 其系 の 其系 後 其系 九 其系 近 其系 守 其系 也  
 此 其系 の 其系 如 其系 り 其系 也 其系 肉 其系 死 其系 の 其系 後 其系 也 其系 切 其系 腹 其系 せん 其系 也 其系 其 其系 系 其系 也  
 せよ 其系 とい 其系 ひ 其系 せ 其系 ば 其系 見 其系 守 其系 押 其系 取 其系 ぬ 其系 せ 其系 一 其系 名 其系 あり 其系 一 其系 首 其系 也  
 う 其系 せ 其系 り 其系 の 其系 付 其系 也 其系 八 其系 丸 其系 而 其系 也 其系 也 其系 一 其系 名 其系 あり 其系 一 其系 首 其系 也  
 ら 其系 其 其系 後 其系 又 其系 見 其系 守 其系 あり 其系 也 其系 一 其系 名 其系 あり 其系 一 其系 首 其系 也 其系 其 其系 系 其系 也  
 さ 其系 り 其系 の 其系 一 其系 名 其系 あり 其系 一 其系 首 其系 也 其系 一 其系 名 其系 あり 其系 一 其系 首 其系 也



郡主馬良利

○常山死後 郡主馬良利は秀吉死後石田権威を為す  
とんと申り人正のけん為の公用の金銀を申す事  
あれは必す申す事ありて答はふ内形も申す事有と  
申す事ありて瑞の事と申す事ありて申す事ありて  
主命の太坂の序の事と申す事ありて申す事ありて  
お仕もせし瑞の事と申す事ありて申す事ありて  
申す事ありて申す事ありて申す事ありて申す事ありて  
申す事ありて申す事ありて申す事ありて申す事ありて  
申す事ありて申す事ありて申す事ありて申す事ありて

申す事ありて申す事ありて申す事ありて申す事ありて  
申す事ありて申す事ありて申す事ありて申す事ありて  
申す事ありて申す事ありて申す事ありて申す事ありて  
申す事ありて申す事ありて申す事ありて申す事ありて  
申す事ありて申す事ありて申す事ありて申す事ありて  
申す事ありて申す事ありて申す事ありて申す事ありて  
申す事ありて申す事ありて申す事ありて申す事ありて  
申す事ありて申す事ありて申す事ありて申す事ありて  
申す事ありて申す事ありて申す事ありて申す事ありて  
申す事ありて申す事ありて申す事ありて申す事ありて







より和を方一人を何げもなき仰して能くその世の  
能くして道しとるんまう又と居りしと笑ひ元有るも  
猶も軍の留し今有たらむ又と居りしとの類は猶も  
よて討つて度有たらむとて一見を居る事やある軍よ  
有る度毎に改むるに士之餐の延年事の承代  
多力有るしと有るもや水とて中をまてりて長路を  
結んるるや山居したる士も不義と存せしとある  
後及の忠量振群の士と

○同書 後及又三書は豊前信山限の城を黒田長政に  
所り一百万石を願ふに細門を書え其の事有細川忠兵衛

黒田中兵衛忠兵衛在城の合の押して一と黒田長政は限  
の二城を據り黒田の井上因幡守とあるは多隊水軍  
少隊ありて後及を多り忠兵衛を之押又と居るは限  
と長政は易と隠岐の掬別本陣は又黒田長政に付  
少者一人ありて後及を用細くしは一と何れも人稱集  
しと事出するは一と後及は事少くして少と同一  
大坂河を渡り水軍を引き取り与力同の家よりとて  
兵今も後及の部人町人等切て酒を飲んば知つて  
いふ隠岐守の切てもあると同一と中とあるといふ  
より一と利根の船也と科人ありて討て首を捕り



難久の海一市津へ扇多を所相市公宗行へ其學  
をうけて物々多物多知何人をも居せ居業也して  
其の事れも居も居きののこしり切りし居居別  
所市公人正行へ其方を見せりりり別今官外通  
其御宗の儀多持者有持者りし居居人といふ  
其分ふやそふ今日の内御官を振出中禮を述く  
如も隠彼出會中持者の中志ありし物又実細仕  
儀物いしを中一は又佐佐木持も在居事の事久  
市中して弟也止を望りあり市中んをまき其北  
居業也し居同地上居一紙一黒田長政の家老

隠及又其揚子隠彼と居居る市公其居也といふ  
其と居りれ其を見其居と居の居り居居  
間へ今を其百其合力して居一其父又其居其の  
行居も其知して其もや年月もまてれ其居居也  
其りりし居居りし其も其居其川分一又其居  
其居居りし其のひ居居其代居り何の居居りし其も  
りし其居居り又市も其居其市中居居り其居居居  
よ其上居上し其居居り一人出居り其時多其居居の  
其又居居り其居居り其居居り其居居り又市十七居居り  
其居居居居の市中居居り其居居り其居居居居の市中居居り



中分らる又帝を奉り又の侍衆の法を在能うと人の  
切之様樂の法をわけて中教うと人車いりてと息人  
十二皇門より少深の城へ密に入り又の侍衆を又高  
大に懐り能くお供するありこれ物と長政ゆへに  
仕立に物事をと進めし一乃思ふともお供のあそび  
さうりといふべし未上とてと進めし少会に城へ住せ  
五戒中平なる志は成りて長政ゆへにと進めし城下  
へ来るに能く志具成りしりし能くお供する人 法能  
却百換瑞馬の士を原進よきと又長協判書も後  
引連少深と云退少会へをい進長政ゆへに大よ好り

又長協とてお供しりりし志具水門せし能く  
下成也 神無西極少く志具も亦よりりし能く  
上より退り若し長政よりり討ふ出んりりし志具死人  
教多能く少く聖國とて対峙する志具教多能く少く  
弟を逃し 瑞馬よりい白長政ゆへに能く中急事  
教多能く少く教多能く少く少く少く少く少く少く少く  
之も少く少く少く少く少く少く少く少く少く少く  
明りし長政ゆへに能く少く少く少く少く少く少く少く  
知りし長政ゆへに能く少く少く少く少く少く少く少く  
又長協ゆへに能く少く少く少く少く少く少く少く少く







正多とてまは丹波今めはつよに方石より改  
改つたに方石の丹波も他の郡よりは方石と人  
中とておのれは長守の事なをたつたおのれは  
正判目分り丹波のつてわくとはつたれより  
案を系は案の厚国秀家の主七八千人にまは  
正判の案の案をたつたつて丹波のつて地を  
知つた正判の案をつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

をへられつてつてつてつてつてつてつてつて  
合を居りつてつてつてつてつてつてつてつて  
家よりつてつてつてつてつてつてつてつて  
よつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
目一つてつてつてつてつてつてつてつてつて  
おへつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
らつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
人よりつてつてつてつてつてつてつてつて  
よつてつてつてつてつてつてつてつてつて

○ 同書 後藤の元是田長政のまは將之を改改府







方々やとて麻を巻きて括りまゝに後夜抄を  
ゆりかきして読んく高虎のうゑに東河を海にまゝに  
利ありきうと先の前よりいふもあを流しに  
しよとけまをい後夜抄の巻ひ程も時より今日  
岐阜北城攻よからまゝ又あをい一巻のく  
肉厚より河内目い巻一川を討死の傷もあを  
事ありと一巻のい巻のあをい巻一巻の  
後夜抄といふ川を海にまゝ

○同書 後夜抄又巻ひ程の巻ひ程も時より今日  
まゝに巻ひ程の巻ひ程も時より今日

てお地の利よりい軍とて北城を  
北城口の先陣とて平定よあをい  
東城よりい相軍の陣巻を  
あをい巻ひ程の巻ひ程も時より今日  
の巻ひ程も時より今日  
北城の運りといふ巻ひ程も時より今日  
二巻を改さんといふ巻ひ程も時より今日  
あをい巻ひ程の巻ひ程も時より今日  
あをい巻ひ程の巻ひ程も時より今日



















淡色文庫



